

さばえ近松文学賞

ゝ恋話 (KOIBANA) 2026ゝ

受賞作品集

2026年

◆受賞作品◆

◆近松賞

「こめか虫送りの夜」

飯田 まり
（東京都）

◆優秀賞

「さばえ、鯖江」

申渡 経砂
（和歌山県）

「春の坂道」

尾藤 克之
（東京都）

◆ 佳作

「初恋は君の嘘」

渥美 楓花

（神奈川県）

「片側の想いで」

今村 亜紀

（東京都）

「失恋前夜」

濱田 敦子

（鯖江市）



特別審査員 藤岡陽子（小説家）

講評

「近松賞」

「こめか虫送りの夜」

(講評) 「こめか送り」という鯖江の一部の地域に残る伝統行事を中心に据えた、熱量のある物語であった。高校卒業後、家業の農家を継ぐため地元に残った青年と、都会の大学に進学した同級生の女性との恋愛、別離には普遍性があり、多くの読者を得る作品だと感じた。害虫を追い払う松明の火が、恋の残り火と重なり、余韻を残した。

「優秀賞」

「春の坂道」

（講評） 約360年前の立待を舞台に、近松門左衛門の少年時代が描かれていた。近松がなぜ物語を紡ぐようになったのか、虚実被膜（嘘と本当）をテーマにするのか、その背景を想像させるようなエピソードが光っていた。まだ恋とも呼べないほど幼く、淡い少年、近松門左衛門の一途な想いに涙が滲んだ。

「さばえ、鯖江」

（講評） 結婚生活が長くなるにつれて徐々に夫への愛情が薄れていく妻の心情が丁寧に、リアルに描かれていた。もう別れてもいいか、とすら思っていた妻が、夫と一緒に鯖江の町を歩き、少しずつ昔の恋心を取り戻していく。夫婦間のずれを、眼鏡のズレとかけたラストもよかった。

「佳作」

「初恋は君の嘘」

（講評） 10代ならではの残酷な三角関係、歪な恋情に心が震えた。説明したい人の心の裏側が描かれていて、近松門左衛門が求めるであろう情念が込められた一作だった。

「片側の想いで」

（講評） とても爽やかで読み心地抜群の物語であった。地元が同じ鯖江だという若い男女の「記憶」がテーマになっている。過去が現在に繋がり、互いの関係性を一瞬で変える構成も秀逸だった。

「失恋前夜」

（講評） 高校時代に家庭教師をしてもらっていた男性が姉の夫になる、という物語。男性への切ない片思いが力みなく魅力的に描かれている。鯖江の榎木清

水と方言が効果的に使われていた。



審査員長 水間 貴子

お陰様で、このさばえ近松文学賞は、今回で10回目を迎えます。2013年に始まったこの企画、途中4年間のブランクがありました。今回は、過去最高の686作品の応募がありました。北陸の小さな町、鯖江市のことを、全国の皆さまに広く認知していただけるようになったのも、財政的にも、人材的にも、苦しい中、なんとか続けてきたからではないかと思っています。地元立待地区の、(近松の里づくり推進会議)の皆さまはもちろん、鯖江市など地元の団体からの応援をいただいています。この場を借りて、改めてお礼申し上げます。と思います。ありがとうございます。

もう一つお伝えしておきたいことがあります。

先月9月6日の豪雨について、この文学賞に応募してくださった方から、お見舞いの葉書が公民館宛に届きました。ニュースをご覧になり、縁者のいない福井県鯖江市に思いを寄せておただけたこと、本当にありがたいことだと感じました。全国の被害に遭われた方々に、心からお見舞い申し上げます。

さて、今回の応募作品の傾向を、ご紹介したいと思います。

一つ目。資料にありますように、やはり、めがねの町鯖江は、抜群の知名度。その中でも、この何回かで、スマートグラスを話題にした作品が増えているのを感じます。SFではなく、実際に装着している方も多くいることをキャッチし、恋愛事情にも反映させている応募者がたくさんいらっしゃることに感じします。

二つ目。小さい町鯖江市で開催され世界的に驚きを持って受けとめられたのが、1995年に開催された世界体操大会です。昨年の30周年記念イベントがメディアで大きく取り上げられてことを目にした方でしょうか、または、ご自身が体操に関わっていたのでしょうか、今回、体操を題材にした作品も目立ちました。

三つ目。パートナー・ファミリシップ宣言を題材にしてくださっている作品があったことは、審査委員というよりも、鯖江市民として、嬉しく思いました。鯖江市は、懐の深い、そういう町です。

鯖江市のことを題材にという縛りのある中で、鯖江市のことをしっかり調べてくださっていることを、本当にありがたいと思いますが、気になることもありました。

一つは、地形とか、町の位置関係が、実際のものと違っていたり、ずれていたりしたこと。フィクションですから、厳密に正確さを要求するものではありませんが、地元民としては、登場人物がその場所からでは身動きが出来なくなる、という感じが否めませんでした。

もう一つは、方言の問題です。方言は、それこそ話されている区域が細かく分かれているので、同じ鯖江市内でも私が知らない言葉もあるのかもしれないが、耳にしたことがない方言で喋っていると鯖江ネイティブとしては、気になりました。

もちろん、物語が上質なものであれば、これらのことは、スルーできるものでした。鯖江市の地域性、産業、文化など、さまざまな角度からの切り込みをなされた作品を、ありがたく、誇らしく読ませていただきました。ありがとうございます。

ございました。

今年も作品の背景・状況は様々で、多様な関係性を持つ人々が織りなす恋花を600以上楽しく、時には苦しく読ませていただきました。

一次審査で26話を選び、二次審査で大賞に選ばれたのは『こぬか虫送りの夜』。都会で暮らす彼女に気後れを感じ諦めかけた青年の恋花が、伝統行事の中の火のようにまた燃え上がり・・・

優秀賞の『さばえ、鯖江』は、夫婦のすれ違いが鯖江への小旅行での夫の気遣いで修復され再び咲く恋花。『春の坂道』は立待地区にいた頃の近松と言葉が話せないお雪との切ない恋花。

佳作の『初恋は君の嘘』は高校生の女の子二人と男の子の少し変わった三角関係の恋花。大人だったらこんなにきれいには咲かないだろう。『片側の想いで』は兄の友だちをずっと好きだった女の子の可愛い恋花。『失恋前夜』は大

好きな家庭教師の大学生が姉と結婚することを受け入れられない妹の悲しい恋花。
みなさんはどの恋花がお好きですか？お好きなものがなかったのならご自分で作ってみませんか？応募をお待ちしています。

どの作品にも様々なシチュエーションでサバエが表現され、鯖江市の良さが感じられます。どうぞ恋花の舞台を見に来てくださいね。

審査の上で特に重視したのは、「感動」をもたらす「文章構成の工夫」「表現」、そして主人公の心情の変化をもたらす原因やきっかけの描き方です。今回の多くの作品が「書き出し」と「結び」が呼応しており、完成度も高く、見事な短編作品になっていました。また、なぜ、主人公がそういう行動や心情になったかということも、丁寧に、矛盾なく描かれていました。クライマックスに近づくにつれて、文章の長短で、たたみかけるテンポのよい書きぶりで、文章もよく練られており、読み返す度に、さらに読み返したいという気持ちにさせられます。

詩人は書き続けることで詩人と言われます。作家は、書き続けることで作家になると思います。

これからも、是非書き続けてほしいと思います。

昨年に引き続き、審査員として参加させていただきました。昨年もそうでしたが、今回も作品を読ませていただく中で、私が知らなかった鯖江の歴史や文化について知ることができ、とても貴重な機会となりました。

学生の一人として作品を読んだときに「どう感じるか」「何が心に残るか」ということも大切にしながら、審査させていただきました。作品を読んでいく中で、私自身もたくさんのかたちを学ばせていただきました。

素敵な機会をいただきありがとうございました。

目次

◆受賞作品◆

◆講評・特別審査員 藤岡 陽子

◆総評・審査員長 水間 貴子

◆講評・審査員 三田村 悦子

◆講評・審査員 林 哲治

◆講評・審査員 松本 実夕

目次

「こめか虫送りの夜」 飯田 まり (東京都)

「さばえ、鯖江」 申渡 経砂 (和歌山県)

「春の坂道」 尾藤 克之 (東京都)

「初恋は君の嘘」 渥美 楓花 (神奈川県)

「片側の想いで」 今村 亜紀 (東京都)

「失恋前夜」 濱田 敦子 (鯖江市)

見聞録 近松の里 たちまち

■さばえ近松文学賞 恋話 (KOIBANA) 2025 ■主催者

掲載の受賞作品は応募に際し、送られてきた内容をそのまま掲載しており、校正・校閲などの編集は加えておりません。

「こぬか虫送りの夜」

飯田 まり （東京都）

パチパチ、とおがらが焼ける音が、夏の夜気に吸い込まれていく。じわりと滲む汗をタオルで拭いながら、翔は手元の松明を高く掲げ直した。

昼間の蒸し暑さの残る田んぼの畦には、おがらが燃える匂いと煙が充満している。前を歩く小学生の男子たちが、面白半分に松明を振り回しては、大人たちに「危ねえぞ」と怒られていた。

「こんか虫おーくれ、隣り町までおーくれ」

子どもの甲高い囃子声が、夜の静寂を切り裂く。おがらの先で燃える炎が、稲を食い荒らす害虫を誘き寄せ、隣村へと追いついていく。

鯖江市河和田地区に筋生田町というところがある。

そこで100年以上前から守り続けられた伝統行事の一つに、「こぬか虫おくり」というのがある。毎年7月下旬の夕方、地藏祭りの参詣に集まった村びとが、かがり火を焚き、少年たちは松明に火をつけて町内を練り歩くのだ。

子どもたちの声に合わせて、炎が大きく揺らぐ。

その眩まばゆさに抗いきれないのか、無数の羽虫たちが光の渦へと飛び込み、そしてチリチリと焼け焦げては泥の中へ墜ちていく。翔の掲げる炎の周りにも、光に魅入られた羽虫がどこからともなく群がり、ジジジと音を立てて火の粉へと変わっていく。自ら炎に飛び込み、あっけなく焼け焦げていく虫の姿を見ると、翔はどうしようもなく、いらだった。

列の最後尾を歩きながら、翔は自分の胸を押さえた。そこには、一匹の得体の知れない虫が巢食っている。作業着のポケットに入ったスマホが、またブルツと震えた気がした。

見なくてもわかる。もうすぐ結婚式を挙げる花梨かりんのSNSだ。きっとウエディングドレスの試着だの、新居の家具だのといった小綺麗な写真ばかりが並んでいるはずだ。

翔は、近松門左衛門の心中物をふと思い出した。近松門左衛門が描いた時代なら、行き場のない恋に狂った男女は手を取り川へ入り、心中したのかもしれない。炎に飛び込むあの虫たちのように。

けれど、俺たちは現代に生きる賢い大人だ。口では死ぬだ何だのとわめくことはあっても、恋の為にみすみす命を落とすことなどない。

花梨は安定した公務員の男を選び、俺は地元で家業の農家を継ぎ、こうして青年団の行事に顔を出している。それが現実だ。

だがこの胸の奥底で、得体の知れない虫が腹を空かせて蠢うごいている。「俺を置いて幸せになるな」という、醜みにくくて生々しい嫉妬の虫。

もう花梨の顔など見たくないはずなのに、SNSのアカウントは繋がったまま。今でもまだ、時々つまらない連絡をよこす彼女を無視できないでいる。

あたりは暗く、日が沈んだ山々は巨大な影となって水田を包み込んでいる。松明の炎が、道の表面を力強く照らし、暗闇に浮かび上がらせた。

夕闇の畦道たいまつを松明の光の列が練り歩く光景は幻想的だ。翔が横を向くと、出穂時期を迎え、大人の膝上まで草丈が伸びた稲は、シンと静まり返っていた。揺らめく松明の火が、田の水面にちらちらと映っているのが見えた。

月明かりの下で歩きながら、翔は田んぼの向こう、暗闇に沈む隣町を見つめた。ぽつぽつと民家の明かりが見える。結婚前夜の今頃、花梨は布団の中でど

んな夢を見ているのだろう。

松明の火の粉が夜風に舞う中、前を歩いていた近所の小学生、健太がふと顔を上げた。

「なあ、翔兄ちゃんは結婚しないの？」

唐突な問いに、翔は足元に向けられていた視線を少しだけ泳がせた。ジジジ、と羽虫が炎で爆ぜる音がやけに大きく聞こえる。

「……相手がいいえよ」

「えー？ 花梨姉ちゃんがいるじゃん」

健太は松明を揺らしながら、あっけらかんと言いつつ放った。その炎の揺らぎが、翔の胸の奥底に棲む虫をチクリと刺激する。

「あいつは、もういいえよ。しかも明日が結婚式だ」

「ふーん。じゃあ、翔兄ちゃん捨てられちゃったんだ」

「……お前なあ」

「うちの母ちゃん、言ってたよ。『翔くんら、よう似おうとったのになあ』って」

世間の目というものは、いつだって無責任で、そして簡単に古傷をえぐってくる。そうだ、俺と隣町に住む花梨は、地元の同じ高校に通う同級生だった。

秋の祭りがきっかけで交際を始めた俺たちは、放課後、自転車を押しながら、市街の高校から町境の川の橋を渡って一緒に帰る日々を過ごした。

河和田川のせせらぎに、どこかの工房からかすかに漂ってくる、漆と木の匂い。夕焼けに染まる田んぼを見渡しながら「綺麗やの」と笑う花梨との間には、まだ何の境界線もなかった。

卒業後、花梨は都会の大学へ進学し、俺は地元に残り家業の米農家の見習いを始めた。盆や正月に彼女が帰省するたび、俺は洗車した軽トラで駅まで迎えに行った。都会の空気をまとって少しずつ大人びていく花梨を助手席に乗せるのは誇らしく、同時にひどく不安だったが、狭い車内で笑い合う時間だけは、高校時代と変わらないお互いの確かな居場所だった。

別れは、大学4年の夏に訪れた。

天候に左右される毎日に嫌気がさし、害虫の防除作業で泥だらけになっていた俺は、ホームに立つ花梨の姿を遠目に見つけて、足がすくんでしまった。

洗練されたシフォンブラウスに身を包む彼女と、爪の奥まで泥が入り込んだ自分。こんな泥だらけの手では、都会を知った彼女を幸せになんてできない。どうしようもない卑屈さが胸を支配し、俺は急に助手席の土汚れと、自分の汗の匂いに恥ずかしさを覚え、自ら軽トラのエンジンを切り、逃げるように嘘のメッセージを送った。

『ごめん、草刈りが長引いとして迎えに行けん』

どんな時も必ず飛んできた俺の不自然な断りに、花梨もお互いの間に引かれた線が決定的なものだと悟ったのだろう。

『そっか。お仕事頑張つての』

短い返信を最後に、俺たちは静かに、けれど完全にすれ違ってしまった。送ったあとで、俺は何てことしてしまったんだ、と後悔しハンドルの上に突っ伏した。

あの日、俺が彼女を突き放した瞬間から、2人の時間は止まったままだ。東京で就職した花梨が、結婚の報告のために隣町に帰って来ていると知ったのは、

ついこの間のことだ。

意気地のない自分ではなく、都市部の安定した男を選んだ花梨。それがあがなえない現実だ。

「うるせえよ。前見て歩け、火が危ねえだろ」

翔は怒鳴^{どな}った。

粘り気のある汗が肌に張り付き、不快さを増した。松明の炎の熱気と、流れる汗で目が痛くなった。

「花梨姉ちゃん、虫と一緒に飛んでっちゃったんだね」

健太は悪びれる様子もなく、また囃子言葉を歌い始めた。

「こんか虫おーくれ」

翔は黙り、強く松明を握りなおした。

飛んでいったのは花梨だけではない。俺の心臓の柔らかい部分を食いちぎったままの、この醜い情念の虫も、未だに彼女の背中を追いかけて飛び回っている。

暗闇にゆらゆらと、炎の先端が割れた舌のように裂けて、青色の幻影が揺れ

た。

花梨の俺に向けられた笑顔や、怒ると口を尖がらせる癖、裸で嗅いだお互いの首筋のにおい。目をつぶっていても、花梨の匂いや仕草が手に取るように分かる。あのかけがえのない日々は、彼女のなかで完全に消え去ってしまったのだろうか。

健太は畦道の泥を蹴とばしながら言った。

「こいつら、なんで死ぬのにわざわざ火に突っ込んでくるの？ 馬鹿なの？」

「……馬鹿なんだよ。遠くから見たりや綺麗なのに、触ったら火傷するって、わかんねえんだろ」

吐き捨てるように言いながら、翔は火の中に飛び込む虫を憐れ^{あわ}んだ。「虫送り」は、非業な死を遂げて虫と化した怨念を丁重に祀る、供養の儀式なのだ。

やがて行列は、町境に伸びる用水路に辿り着いた。

子どもたちが横一列に並び、田んぼの向こう側へ向かって一斉に叫ぶ。

「飛んでいけ！ 隣の町へ飛んでいけ！」

声の向こうには、花梨が住む家々の灯りが、星屑のように瞬いていた。翔は

松明の柄を握りしめ、光を睨みつけた。

俺はそっちへは行かない。お前の人生を壊す勇気もない。
けれど。

「いっそ、飛んでつてまえ」

翔はふと、恐ろしいことを願った。俺を食い破ろうとしているこの胸の虫も、炎に誘われて空へ舞い上がり、隣町の花梨のいる部屋へ飛んでいけばいい。そして、幸せな夢を見ているお前の柔らかい胸を、チクリと刺せばいい。そして彼女の胸に潜り込み、俺と同じように、どうしようもない熱で彼女を狂わせてしまえばいいのだ。

火がパチパチと爆ぜる。炎が火の粉とともに舞い上がり、翔の顔を生々しく浮かびあがらせた。

作業着のポケットが震え、翔はスマホを取り出した。画面が闇の中でやけに白く光っていた。

メッセージは花梨からだった。

『翔、ごめん』

『今からあの場所で会える？』

翔は震える指でスマホを握りしめた。

メッセージが続けて届く。

『お願いやき、来て』

振り返ると、地元の男たちが松明をまとめ、最後の火の粉を空へ向けて投げているところだった。子どもたちの無邪気な掛け声が、耳鳴りのように響いている。

翔は顔を上げた。

山から吹き下ろした夜風が、翔の頬を撫でた。

俺は、ここで終わらせるつもりだった。

この炎に、俺の未練も、彼女への執着も、すべて焼き捨てて、明日から「普通の男」に戻るつもりだった。

だが、今にも燃え尽きそうなこの炎は、焼き尽くすためのものではなかったのかもしれない。

隣にいた健太が、不思議そうな顔で翔を見上げた。

「翔兄ちゃん、もう終わりだよ？ どこ行くの？」

翔は何も答えず、川へと架かる橋の方へ歩き出した。

翔の持つ松明の先には、今もまだ「こぬか虫送り」の赤い残り火が揺れている。

橋のたもとに着く直前、翔は花梨からのメッセージに、たった一言だけ返信を打ち込んだ。

『今度は迎えに行くで』

送信ボタンを押した瞬間、翔は持っていた松明を、橋の欄干らんかんから川へ放った。スマホをポケットにしまい顔を上げると、橋の上で花梨がこちらをじっと見つめて立っていた。

ときには身を焼く恋も、必要かもしれない。

「さばえ、鯖江」

申渡 経砂

（和歌山県）

「さばえ」

突如耳に届いたその言葉を、咄嗟に漢字変換できなかったのは私のせいじゃないと思う。

聞いたことがあるはずなのに、思い出せなかった。

「おい、市町村の名前だけじゃわかんねえって」

隣に座る男性に指摘されて、やっと気づいたかのように彼は少しはに cand 言葉を付け足した。

「福井県。福井県鯖江市出身です」

そこでやっと、漢字変換できた。

とはいえ、この漢字で合ってるのか自信はあまりない。ただ、聞き覚えのあるその音に、つい言葉かくちびるからこぼれ落ちてしまった。

「ちりとてちん……」

誰に向けたわけでもない、ただの独り言にも満たない言葉。それを拾って、目の前の彼はふっと目を細めた。

「そう。あのドラマの主人公の出身地。地元が取り上げられるのが嬉しくて、毎日見てた」

その柔らかな瞳に自分が写っていることを自覚した瞬間、私の胸が小さく跳ねた。

なんて。

もう何年前なのかも覚えていない、夫との馴れ初め。

“馴れ初め”なんて言う綺麗に聞こえるけど、ただの合コン。

「あの時は、『運命の出逢いだ』ってテンション上がったのになあ」

すぐにズれてくる眼鏡を、指先で押し戻す。安っぽいメロドラマを眺めながら、落とした言葉は誰にも拾われず、薄暗いリビングの空気に溶けて消える。

— ねえ、あの人めちゃくちゃ可愛い。

— 私今日、頑張って連絡先聞く！

— なんて連絡しよう？ 緊張する。

— 今度デートすることになった。

— 私のこと、『好き』だって……。

逐一友達に報告していた、夫との進展。

思い返すと、ただ恥ずかしい。

けれど当時は真剣で、夫と仲良くなれることが、夫と“恋人”という関係になれたことが、嬉しくて仕方なかった。

プロポーズされたことも、みんなに祝福されながら結婚式を挙げたことも、寝る時や朝起きたときに彼の顔を眺めることができることも。全部が幸せで、どこか現実味がなかった。

メーカー勤務の夫の仕事は過酷で、ふたりだけの生活のときには気にならなかった夫の勤務形態が、息子である悠太が生まれたことで不満の種になった。

やっと寝かしつけたタイミングで帰宅する夫。

夜泣きで寝不足のなか、夫の食事を準備しなきゃいけないという義務感。

私の育児休暇が終わってからは、仕事と育児の二足の草鞋。そこに夫の存在はなく、あるのは「ワンオペ」という現実のみ。

やっと悠太が小学生に上がり、自分のことは自分でできるようになってきたことで、私の負担はぐっと減った。

それと同時に夫の存在意義が、——わからなくなった。

いつそ、このままふたりでいる意味も、なくしてしまえば楽なのかもしれない。考えた夜も一度や二度じゃない。

ガチャン

玄関のドアが開く音。

「ただいま」

夫の声に「おかえり」と返事をする。視線はテレビに向けたまま。

あ、また眼鏡がズレてきた。

カタカタと、鞆を置く音と、食器を動かす音が聞こえる。いつからか、夫の食事を準備するのをやめた。作ってはいる。でも、私が盛り付けなくても、夫が自分でやればいいと、私が動くのをやめた。それでも夫は、何も言わなかった。

「ママ」

夫が私を呼ぶ。

いつからか、名前を呼ばれることもなくなった。

「何？」

呼ばれたから、視線を夫に向ける。

決して仲が悪いわけじゃない。ただ、お互いに関心が薄くなっただけ。

「今度、鯖江に出張に行くことになったよ」

「鯖江？」

夫と付き合い、結婚してから、もう幾度となく耳にしてきた地名。

そして、長期休みに過ごす場所。

でも今年は、私が体調を崩したせいで夫も帰っていない。「ふたりだけでも行ってきたら？」という私の言葉に、悠太は「ママがいないと嫌だ」と泣き、夫は「俺だけ帰っても、うちの両親も別に喜ばないから」と帰省するのをやめた。

夫の両親には良くしてもらっているので申し訳なかったけれど、無理をするのも辛くてやめた。

「うん。それも金曜日の出張だから、週末ホテルを取れば一緒に泊まれるかな、と思って」

ここで私たちを誘うあたり、この人は不倫とかしない人なんだろうな。なんて、本題とはズレたところを思考が巡る。

「悠太と私も？」

「そう。金曜日の夜か、土曜日の朝にでも合流できたら、と思って。別にうちの両親に会わなくても、ブラブラするだけでもいいかなって」

鯖江の街をブラブラ……。

そういえば、結婚の挨拶をしたときに夫に街を案内してもらったことはあったけれど、それ以降、特に悠太が生まれてからは動物園以外、殆ど夫の実家で過ごしている。悠太は動物園のレッサーパンダがお気に入り、毎日のように動物園に通っている。そのせいで、他のことをする余裕がない。と言った方が正しいのかもしれない。

レッサーパンダの前で何十分も動かない悠太の姿を思い出し、「悠太はまた『動物園に行きたい』って言い出すんじゃない？」と笑う。

夫の前で笑えたことに、自分で驚く。

そういえば、最近こんなふうに会話することも殆どなかったかもしれない。

「じゃあさ、うちの両親と悠太に動物園に行ってもらって、俺たちがブラブラするのは？」

予想外の提案に、身体が固まる。

「私と、パパが……？」

疑うような口調になってしまったのも仕方がないと思う。だってもう、悠太が生まれてからずっと、ふたりで出かけたことなんてない。

「うん。たまには、どう？」

あの日のように目を細める夫に、ときめくことはない。

けれど、拒否する気持ちにもならなかったことに、自分でも驚いた。

「うん。悠太にも相談してみる。鯖江に行くなら、私も金曜日は午後休とれるか調整してみるよ」

ほんの少し、夫に向ける自分の声が、いつもより丸い気がした。

翌朝、悠太に夫の提案を伝えたら、「行く！動物園に行きたい！」と予想通りの返事が返ってきて、また笑ってしまった。その場に居た夫の、「ママとパパは一緒じゃないけど、いい？」という確認にも、悠太は「おじいちゃんおばあちゃんが居るならいい」と揺らがない。

「じゃあ、パパたちはデートしてくるから」

夫のその言葉に、じわりと指先が温かくなるのを感じた。
デート。

数年ぶりのその響きが、ただ新鮮だったかもしれない。でも、自分のなかの何かが期待に揺れている気がした。

*

久しぶりの鯖江の街は、空気がさらりと乾いていて心地よかった。

仕事終わりの夫と合流して三人でご飯を食べて、小さなユニットバスに順番で入ってひとつの部屋で眠る。朝、ホテルのロビーまで迎えに来てくれた夫の両親に悠太を預け、私たちは街歩きに出かけた。

「この辺を歩くのは俺も久しぶりだ」

すぐ隣を見上げると、夫は穏やかな表情で周りを見回している。

「変わった？」

悠太には、主語と目的語をちゃんと使いなさい。と言っているくせに、自分は夫に最低限の言葉で問いかける。それでも夫は、私の質問の意図を汲み取ってくれる。

「変わった。でも、変わってない」

「そっか」

それ以上は何も問わないし、説明もない。

でも、ふたり並んで歩くのは案外悪くない。

触れ合わない距離。でも決して、遠くもない“家族”の距離。

特に何を見るわけでもなく、お店に入るわけでもない。ただ、街並みを眺めながら歩くだけの時間。でもそれが新鮮で、ただどこか懐かしくて、胸が切なく音を立てた気がした。

「ワッフル」

胸の音を誤魔化すために、目の前にあった和菓子屋さんに立てかけられた看板の文字を読む。それ以外の意図はなかったはずなのに、夫に「入ってみる？」と尋ねられると、自然と首を縦に振っていた。

「ここ、昔からある店なんだ」

独り言のような夫の呟きに、「へえ」と返事にもならない返事をして店内を覗く。ショーウィンドウの中に、外の看板と同じフォントの文字を見つけて、「これ、買って帰ろ？」と夫に提案した。

「そうだね。悠太もきつと好きな味だと思うから、お土産にしようか」

店員さんに「ワッフルを六個ください」と伝えて、支払いを済ませる夫に

「食べたことあるの？」と尋ねる。

「うん。実はこのワッフル、大好き」

もう長い年月と一緒に過ごすのに、初めて聞く夫の告白に思わず笑いが漏れる。

「初めて聞いた」

「俺も、初めて言った」

笑い合って、自然と手を繋いだ。

あまりに自然で、驚くことも忘れていた。

「そっぴいばさ、少し遠いんだけど眼鏡屋さんに行ってもいい？」

夫の言葉に、首をかしげる。

夫は私と違って目が悪くない。眼鏡をかけているところも見ただけでもないのに、どうして眼鏡屋に？という私の疑問はきつと、表情に出ていたのだろう。

「眼鏡、すぐにズレちゃうでしょ？……前から気になってたんだけど、言うタイミングなくて」

呼吸が、止まった。

「せっかくの鯖江だし、新しいの買おうよ」
ずっと、見えているつもりでいた。

でも本当は、少しずつズレていたのかもしれない。

見ようとしていなかったのは、私のほうだったのかもしれない。

「い、いの？」

「悪いわけではないじゃん」

目を細めて笑う夫に、ほんの少し、心臓が跳ねた。

「ヒロちゃんのその眼鏡も似合ってたて好きだけどき。ズレなくてもっと似合うやつ、探そ。ここならきつと見つかるから」

久しぶりに呼ばれるその呼び名に、涙がこぼれそうになるのを必死に堪える。
「うん。じゃあ、たっくんが選んでくれる？」

私も、久しぶりに夫の呼び名をくちびるに落とす。

「俺が選んでいいの？」

「うん。たっくんを選んでもらいたい」

「センス悪いって、言わないでよ？」

「それはわかんない」

手を繋いだまま、指を絡めたまま、笑い合う。

夫の指が温かいということを、久しぶりに思い出した。

夕方、悠太はどんな顔をして私たちを迎えるだろう。

笑っているのか、それとも「やっぱり寂しかった」とべそをかいているのか。
どっちでも良い。

どっちでもきつと、半日ぶりに「おかえり」「ただいま」と言い合ってハグ
をすれば、笑顔で今日一日を終えることができる。

明日になれば、また元通りかもしれないけれど。

それでも――。

鯖江での、この一日を、私はきつと忘れない。

のちに近松門左衛門と呼ばれる人は、若き日を越前の鯖江、立待《たちまち》のあたりで過ごしたと伝わる。これは、その少年の日の、ひとつの恋の話である。

信盛《のぶもり》は武家の子だった。父は剣を持たせたがったが、信盛は素振りの最中にも頭の中で話をこしらえ、木刀を取り落としては叱られた。叱られると、決まって誠照寺《じょうしうじ》の門前へ逃げる。門前に座り、行き交う人を眺めるのが好きだった。傘を直しながら歩く女、荷を担いで急ぐ男、母の袖を握って泣く子ども。あの女はどこへ行くのか、あの子はなぜ泣くのか、あの老人は何を待っているのか。信盛は勝手に身の上をこしらえ、口の中でぶつぶつと筋を組み立てる。村の大人は、ぼうっとした役立たずだと笑った。父も、この子は武家には向かぬと、ため息をついた。一度などは、信盛が稽古を抜け出して門

前に座り込んでいるのを見つけ、襟をつかんで引き立てたこともある。されるがまま家まで歩きながら、信盛はそれでも、すれ違う物売りの女がなげ眉を寄せていたのかを考えていた。叱られている最中ですら、頭の中では別の話が動いていた。

お雪は、その門前の隅にいつもいた。寺男の娘で、信盛より二つ年下の小柄な娘だ。幼い高熱で耳が聞こえなくなり、声もうまく出せない。村の子らは、口がきけぬ耳が聞こえぬと遠巻きにして、仲間に入れなかった。お雪はひとり、地面に小石を並べ、丸い形を作っては崩し、また並べて遊んでいた。寺の掃除や水汲みをよく手伝い、僧たちには可愛がられていた。早朝、まだ暗いうちから井戸端に立ち、桶を運ぶ。重い桶を提げても、お雪は足音を立てなかった。音のない世界に育った者の、身についた静けさだった。信盛は時折、その後ろ姿を門の陰から見ていた。

ある日、顔を上げると、お雪がこちらを見ていた。信盛がぶつぶつ呟

くのを、唇の動きで読んでいたらしい。見られていた恥ずかしさに、信盛はつい、その話を声に出して語ってみせた。むかし、ひとりの娘がな、好いた相手に何も言えぬまま、遠くへ嫁いでいくのだ――。声は届かぬはずだった。お雪は、信盛の唇と手振りと顔つきを食い入るように見て、話が佳境にかかると、小さな手で宙にひとつの仕草を描いた。娘が、ふと足を止めて振り返る。それは信盛がまさに語ろうとしていた、次の場面そのものだった。

語るあいだ、お雪の目は話に合わせて笑い、また曇った。声のない相づちだった。信盛は驚いた。声も聞かず文字も読めぬ娘が、話の先を当てる。言葉ではなく、人の心の動きそのものを読んでいた。

それから二人は、毎日のように門前の石段で会った。信盛は声色を変え、身振りを交え、ひとりで何役も演じてみせる。お雪はその唇を読み、頷いたり、首を振ったりして、その先を仕草で示す。時にはお雪が、信盛の思いもよらぬ結末を、手の動きだけで描いてみせる。すると話はぐ

っと深くなった。声を持たぬ娘は、声高な台詞よりも、口ごもる間や、伏せたまなざしや、握りしめた手のほうに、人の本当の心が宿ることを知っていた。

門前では毎日、誰かが誰かを見送っていた。あるとき、旅立つ若者を見送る老婆が、笑って手を振りながら、袖の下でこぶしを固く握っていた。信盛は気づかない。お雪が、その握りこぶしを指して、自分の胸を押さえてみせた。痛い、と。笑った顔の下に、別の心がある。信盛は、人の胸を打つのは、声をかぎりの嘆きではなく、その下に呑み込んだもののほうだと、少しずつ分かってきた。

あるとき信盛は、語りに詰まって黙り込んだ。次の場面が、どうしても浮かばない。すると、お雪が筆を取るように指を動かし、宙に川の流れを描いた。行き詰まったら、水のように、低いほうへ流せばいい。そういう意味だと、信盛は受け取った。話は、また動きだした。

信盛は、お雪のその日の機嫌が、門前へ来る歩き方で分かるようにな

った。小石の並べ方がいつもより乱れている日は、家で何か寂しいことがあったのだ。声を通さず、表情と所作だけで通じ合う。それは村の誰と話すよりも、深く満ちた時間だった。信盛にとつてお雪は、この世でいちばん話の通じる相手だった。声がなくても、いや、声がないからこそ。

夏の門前は、参詣の人で賑わった。信盛が石段で話を語りだすと、いつしかお雪のほかにも、足を止めて見入る子が出てくる。声は届かずとも、お雪の仕草の先回りに、子らは目を丸くした。お雪を遠巻きにしていた村の子らが、その日ばかりは、輪の端でいっしょに笑っていた。やがてその笑い声も絶えて、門前は雪に埋もれた。

越前の雪は重く、降りやんだ朝は町がしんと静まる。信盛が雪を踏んでいくと、お雪はもう来ていて、白い地面に指で絵を描いていた。山、家、小さな人。信盛が物語を語ると、お雪はその場面を雪の上に描き足していく。かじかんだ手を袖の中でこすり合わせながら、お雪は飽きず

に描き続けた。やがて陽が差すと、二人の話は端から溶けて消えた。お雪は消えていく絵を、惜しむふうもなく眺めている。声に出さぬ話も、雪に描いた話も、後には何も残らない。それでも確かにそこにあったのだと、お雪の静かな横顔が言っていた。

あるとき、年上の子らがお雪をからかい、並べた小石を蹴散らした。ふだん喧嘩などしない信盛が、そのとき子らのあいだに割って入った。お雪は、おまえらよりずっと多くのことが見えとる。そう言っただけにらみつけた。子らは役立たずの分際だと笑って去ったが、信盛は気にしなかった。散らばった石を拾い集めていると、お雪が黙って横に来て、信盛の集めた石を、もとの丸い形に並べ直していく。その手つきの迷いのなさに、信盛は、この娘の見ている世界を、いつか皆に見せてやりたいと思った。声にならぬものを、声にして、世に届けてやりたい、と。

雪が解けると、二人は寺の縁側で、長いことかけてひとつの話を作った。城のいちばん高い窓から、ひとりの若侍を毎日見ている姫の話だ。

姫は声を出せず、文を書くこうにも、筆を持つと手が震えてしまう。想いは募るのに、伝えるすべがない。姫は毎朝、若侍が通る刻限になると窓辺へ立ち、見送ったあとは、また長い一日を黙って過ごす。声があれば一言で済むことが、声がないだけで、こんなにも遠い。信盛がそこまで語ると、お雪は窓辺に立つ姫のように胸へ手を当て、何度も口を開いては閉じる仕草をした。言いたいのに言えぬ、その苦しさを誰より知る者の動きだった。結末に、信盛は迷った。姫に想いを告げさせるか、告げさせぬか。筆を宙に止めた信盛の前で、お雪は、一本の指を花に見立て、自分の胸にいちど当ててから、そつと前へ差し出した。言葉ではなく、花に託して。言葉より雄弁なその所作に、信盛は、これだ、と思った。声がなくとも、心はこれほど語れるのだ。縁側の陽だまりで、二人は同じ場面を、何度も作り直した。

別れは、その春に来た。

信盛が、学問のために京へ上ることになったのだ。役立たずと笑われた少年に、ようやく巡ってきた、世に出る機会だった。父も、武家が無理なら学問でと、ついに折れたのだった。

発つ朝、お雪は門前で待っていた。声をかけることも、かけられることもないまま、ただ一枚の紙を、少し震える手で差し出した。寺の僧に頼み、苦勞して覚えた文字で、たどたどしく書いたものだった。

——あなたの物語のおかげで、わたしには、世界が聞こえました。

受け取った紙は、まだお雪の手のぬくもりが残っていた。信盛は、その紙を見つめたまま動けなかった。言いたいことは山ほどあった。京へなど行かず、ここに残ってお前と話を作りたい。お前の見ている世界を、いつか必ず世に出す。お前が、おれにとつてどれほど大切な相手か——。だが、そのどれひとつも口にできなかった。語ることを誰より好んだ少年が、いちばん語りたい相手の前で、いちばん大事な言葉を呑み込んだ。お雪が教えてくれたとおりだった。言えなかった想いだけが、

こうして胸の底に、消えずに残る。

お雪は、何か言いかけるように口を動かした。だが声にはならず、結んだ唇が、かすかに震える。信盛は、その唇を読もうとして、読めなかった。読めないことが、これほど苦しいとは思わなかった。

信盛は紙を懷に深くしまうと、振り返らずに坂を下った。涙を、お雪に見られたくなかった。雪解けの水が、坂の脇を音を立てて流れている。お雪が坂の上で、いつまでも手を振っていたことを、信盛は、見ないまま知っていた。

やがて信盛は京の公家の屋敷に仕え、書物に埋もれて日を送った。賑やかな都の言葉のただ中にいても、ふと、声のない門前の時間が恋しくなる。この世でいちばん話の通じた相手は、ひとことも声を発さなかった娘だった。都には言葉が溢れていた。歌も、噂も、商いの掛け声も。だが、どれほど賑やかな言葉の中にいても、信盛の心に届くものは少な

かった。文机に向かうたび、雪に描いては消えた話の数々がよみがえる。形には残らずとも、まぎれもなくあつた時間だった。あの門前の、声のない時間ほど、多くを語ってくれるものはなかった。

歳月は流れた。

信盛は京で名を上げ、近松門左衛門として、数多の女を書いた。身分に阻まれ、世間に縛られ、言いたいことを言えぬまま、声なき心で愛する女たちだった。客は、その沈黙にこそ涙した。

なぜそうした女ばかり書くのか、近松は生涯、語らなかつたという。

ただ、晩年まで懷に古びた一枚の紙を忍ばせ、折にふれて取り出しては、しばらく黙って眺めた。あるとき弟子が、それは何かと尋ねる。近松は答えず、紙の上を、指でそつとなぞつた。それから、いちど胸に手を当てた。その先の仕草を、近松はしなかつた。

夕暮れの放課後、美術室はいつも眼鏡の研磨削みたいな匂いがした。

「ねえ、律。これ、どう思う？」

差し出されたスマートフォン画面を覗き込む。そこには、ブレた夜の街を背景に、仲睦まじく歩く男女の後ろ姿が写っていた。男のほうは、この学校のサッカー部エースで、誰もが知るモテ男の蓮。そしてその隣で腕を組んでいるのは、うちのクラスのギャル。

画面を差し出してきた本人——ひまりは、いつもの太陽みたいな笑顔を少しだけ曇らせて、困ったように眉を下げていた。

「浮気、だよねえ。これ。完全にクロだよね」

「……みたいだね」

「あはは、やっぱり？ 律が見てもそう思う？ いやー、蓮だったら『あの日は部活の遠征の居残りがあった』とか言ってた癖に、がつつり居残ってんじゃない、

女子と」

ひまりは笑っていた。乾いた笑い声。だけど、その大きな瞳の奥は、今にも決壊しそうなダムみたいに波打っている。

私は、心臓が痛いくらいに跳ねるのを必死に抑えながら、無表情を装って自分の眼鏡を指先で押し上げた。

住む世界が違う、と思っていた。クラスの中心で、いつも眩しい光を振りまいているひまり。対する私は、美術室の片隅で油絵の具のパレットをナイフで削っているのがお似合いの陰キャ。共通点なんて、この「なんとなく入った美術部」という空間だけ。週に数回、同じ部屋で筆を動かすだけの、ただの同級生。

それなのに、ひまりが時折見せる無防備な笑顔や、私の描く暗い絵を「なんか吸い込まれそう。律の頭の中、覗いてみたい執念を感じる!」と真っ直ぐに褒めてくれるその声に、私はどうしようもなく惹かれてしまっていた。

気づいたときには、遅かった。これはただの憧れじゃない。

ひまりには彼氏がいる。それも、学校一のイケメン。私なんて逆立ちしたっ

て敵わない、眩しい世界の住人。

だけど。

「……ねえ、ひまり」

私はパレットナイフを置き、ひまりの顔をじっと見つめた。

「そんな奴、こっちから振っちゃえばいいじゃん」

「うーん、でもさ、私、蓮のこと本当に好きなんだよね。初めて付き合った人だし。だから、ちょっとくらい遊んでも、最後に私のところに戻ってきてくれればいいかなって……」

健気で、優しく、馬鹿みたいな女の子。

その眩しさが、私の中のどす黒い感情をじりじりと炙り出す。なんでそんな男に固執するの。私なら、私なら絶対にそんな顔させないのに。

愛おしくて、同時に、そんな風に男に執着する彼女がひどく憎らしかった。

「……じゃあさ」

私は、自分の声が少し震えているのを隠すように、わざと意地悪く口角を上げた。

「仕返し、してみる？」

「仕返し？」

「そう。蓮くんに、お前だけのものじゃないって分からせるの。ちょっと嫉妬させて、焦らせて、ひまりの大切さを思い出させる。……協力してあげようか？」

ひまりは目を丸くした。まさか、いつも大人しい私がそんな提案をするとは思わなかったのだろう。

「え、律が？ どうやって？」

「簡単だよ。私と、付き合ってるフリをすればいい」

おかしいな提案だということは分かっていた。女子同士の疑似恋愛なんて、蓮が本気になるかどうかはわからない。

でも、ひまりは「おもしろそう！」と、いつもの無邪気な笑顔を取り戻して私の手を握った。

「いいよ、やろう！ 律、意外と策士なんだね。蓮の焦る顔、ちょっと見てみたいかも！」

ひまりの体温が、握られた手から伝わってくる。熱い。太陽の熱だ。

私はその温もりに溺れそうになりながら、心の奥で冷酷に笑っていた。

ひまりは知らない。

その画面に写っている蓮の浮気相手が——他ならぬ、私であることを。

話は一ヶ月前に遡る。雨の日、図書室の裏で雨宿りをしていた私に、蓮が声をかけてきた。「お前、ひまりと同じ部活のやつだろ」。それが始まりだった。

蓮はひまりに飽きていたわけじゃない。ただ、ひまりの「完璧な優しさ」に息が詰まっていたのだ。何をしても怒らない、いつも笑顔で受け入れるひまり。その聖母のような眩しさに耐えかねて、蓮は歪んだ刺激を求めた。それが、クラスで一番目立たない、ただどこか昏い目をしている私だった。私は蓮が好きだったわけじゃない。ただ、蓮の後ろに透けて見えるひまりの影を追いかけていただけだ。

蓮と手を繋ぐとき、私はひまりの手を想った。蓮に抱きしめられるとき、ひまりが感じているであろう温もりを脳内でトレースした。

間接的にでも、ひまりと繋がりたい。そんな狂った執着。

そして今、私は「浮気相手」として蓮を縛り付けながら、「親友の協力者」としてひまりの隣を陣取っている。

「ねえ律、見て。蓮から『今日、部活のあと空いてる？』ってラインきた。やっぱり律の言う通り、最近私が律とばかり一緒にいるから、焦ってきたのかも！」

放課後の美術室。ひまりは嬉しそうにスマホを私に見せてくる。

私はひまりの髪に触れた。柔らかくて、甘い匂いがする。

「よかったね、ひまり。でも、まだ油断しちゃダメだよ。今日はわざと断って、私と遊びに行こう。もっと焦らせなきゃ」

「うん！ 律といえるの、最近すっごく楽しいし！」

ひまりは私の意図通り、私にばかり構うようになった。休日の買い物も、放課後の買い食いも、全部私と。蓮からの誘いを断るたびに、ひまりは少しだけ胸を痛め、だけど私との時間に笑顔を見せる。

その笑顔を見るたびに、私の胸は激しい歓喜と、それ以上の罪悪感で引き裂かれそうになった。

私はひまりを傷つけている。ひまりが愛する蓮を寝取り、ひまりを騙して、自分の方を向かせている。

最低だ。

分かっている。でも、やめられない。

私を見つめるその瞳が、私だけに向けられるその笑顔が、あまりにも美しくて。

「そういえばさ」

ひまりが美術室の窓の外を眺めながら言った。

「私のおじいちゃん、福井の鯖江の出身なんだよね。知ってる？ 鯖江」

「え……眼鏡のところでしょう？」

「そうそう！ それとね、実は隠れた歴史があつてさ。『近松門左衛門』って知ってる？ 文楽の」

「国語の時間にやった気がする。『曾根崎心中』とかの……」

「そう、それ！ 近松門左衛門って、幼少期を鯖江で過ごしたんだって。おじいちゃんがよく言ってたの。鯖江は『吉江藩』っていうのがあって、近松はその風土の中で感性を育てたんだよ、って」

ひまりは、ふふ、と悪戯っぽく笑った。

『『心中』つてさ、当時は究極の愛の形って言われてたんだよね。現世では結ばれないから、来世で一緒になろうねって、二人で死ぬの。……今思うと、すごく不器用で、ちょっと怖いけどね』
心中。

その言葉が、私の鼓膜をピシヤリと叩いた。

現世では結ばれない二人が、現世のすべてを捨てて、一つになる。

（私とひまりみたいだ、と思った。）

男を愛し続けるひまりと、そのひまりを騙しながら愛する私。私たちのこの歪んだ関係は、どう転んでもハッピーエンドにはならない。いつか蓮との浮気がバレる。ひまりは私を軽蔑し、二度と口をきいてくれなくなるだろう。

その破滅へ向かうカウントダウンの中で、私は今、ひまりと二人の時間を過ごしている。

これは、精神的な心中だ。終わりが分かっているのに、私たちは泥沼に向かって手を取り合って歩いている。

「……ひまりは、心中したいと思う？」

私は、絞り出すように聞いた。

ひまりは驚いたように私を見て、それからいつものように、太陽みたいに眩しく笑った。

「まさか！ 私は死ぬまで蓮と生きたいよ。たとえ蓮が、他の誰かを見ていたとしてもね」

心臓が、冷たい氷を突き刺されたように冷たくなった。

知っているのだ。ひまりは。

蓮が浮気をしていることも。その相手が、誰であるかも。

◇

「……気づいてたの？」

私の声は、自分でも驚くほど掠れていた。

美術室には、もう私たちしかいない。夕日が窓から差し込み、部屋全体を真っ赤に染め上げている。まるで、すべてが燃え尽きていくような、不穏で美しい赤。

ひまりは、私が描いていた途中の油絵を見つめていた。それは、深い青色の海の中に、二つの光が沈んでいくような、暗い絵だった。

「うん。気づいてたよ。蓮のシャツから、律の使ってるシャンプーの匂いがしたから」

ひまりは穏やかに言った。怒るでもなく、泣くでもなく。ただ、いつもの優しい声で。

「律、美術室の石鹸、いつもこれ使ってるでしょ？ 独特のハーブの匂い」
頭が真っ白になった。

じゃあ、今までのことは全部。私に騙された振りをしながら、私を嫉妬させるための道具にしていたの？

「なんで……じゃあ、なんで私と付き合うフリなんてしたの？」

「フリじゃないよ」

ひまりが振り返る。その瞳に、夕日の赤が反射して、怪しく、美しく輝いていた。

「律が私を見てるの、ずっと知ってた。蓮が私に息苦しさを感じて、律のこ

ろに行つたのも。……ねえ、律。私、蓮のことが大好きなの。でもね、蓮が律を抱きしめるとき、蓮は律の中に私の影を見てるんだよ。そして律は、蓮を通して私を見る。……だったら、私が律を繋ぎ止めておけば、蓮も、律も、ずっと私の手のひらの中にいてくれるでしょ？」

背筋が凍りついた。

太陽だと思っていた。眩しくて、優しく、無垢な女の子だと。

違った。ひまりは、すべてを焼き尽くす太陽だったのだ。私の抱く歪んだ愛憎なんて、彼女の巨大な執念の前では、小さな火遊びに過ぎなかった。

「律は、私から離れられないよ。私を傷つけてるっていう罪悪感と、私と一緒にいたいっていう欲に、もう溺れてるもんね」

ひまりが一步、私に近づく。

「……近松門左衛門の心中モノってね、大体、男が意気地なしで、女のほうが覚悟が決まってるんだって。おじいちゃんが言ってた」

ひまりの手が、私の頬に触れた。その手は、驚くほど冷たかった。

「私たちも、心中しょっか。律。この、誰も救われないままで」

ひまりの顔が近づいてくる。

私は、拒むことができなかった。彼女の言う通り、私はもう、この太陽の重力から逃れることはできない。

重ねられた唇は、ひどく切なくて、そして、狂おしいほどに甘かった。

夕暮れの美術室。私たちは、お互いを傷つけ合いながら、終わりのない暗闇へと、二人で沈んでいく。不器用で、歪んでいて、だけど世界で一番美しい、私たちの心中。

「鯖江？ 鯖江って、福井の？」

ハンバーガーショップの奥にあるバックヤードで、バイトの休憩中に思いがけず耳にした、ひさびさに聞く故郷の地名だった。もう、何年も帰っていない場所。

「えー、島田さん、知ってるんですか？ えっと、さ…ばえ？」

アルバイト仲間の菊池さんが振り向いて言う。菊池さんは金髪のロングヘアで、爪が魔女のように長い。でも、仕事はてきぱきとこなす「しごでき」女子だ。

「いや、知ってるも何も、俺、その…」

そう言い掛けたところで、菊池さんがぐいっと言葉をかぶせる。しごでき女子は反応が早い。まあ、せっかちとも言っ。

「あ、そうそう、島田さん。この子、新人の『イトウちゃん』です。島田さん

配達メインだから、まだ会ってなかったよね？ イトウちゃん、上京してきたばかりなんだって。その『さ、ば、え』から」

菊池さんの奥のほうに目を向けると、ロッカーの前、照明のあまり当たらない場所に小柄なシルエットが座っていた。肩くらいの黒髪で、顔は見えなかった。

「ああ、そうなんだ。へえ、初めて会ったなあ、上京してから鯖江出身の人って。どうも、島田です。一応、大学生やってます」

「うけるー、島田さん。一応ってなに？」

菊池さんが手を叩いて笑う。俺も、つられたように愛想笑いを返す。

大学進学を理由に鯖江を離れて上京したものの、最近は大学にもほとんど行かず、バイトばかりの生活になっている。特に目標もやりたいこともなく「一応大学生」が今の自分にぴったりの表現だと思った。

我ながら情けないとぼりぼりつむじのあたりをかいていると、菊池さんは、休憩時間が終わる五分前にはきつちりとひとり仕事に戻って行った。

そしてバッグヤードには、何とも頼りない男と、薄暗い場所で微動だにしない

俯いたままのシルエットだけが取り残されることになった。

長く、重い沈黙が続く。

さすがに声を掛けたほうがいいかと思い、意を決して話し掛けた。

「…えっと」

すると、シルエットがびくりと大きくはね上がった。

「あ、ごめん！ 本当ごめん！ 驚かせて…」

慌てて謝ると、シルエットがぼそりと何かを言った。

「え？」

聞き返して耳を傾けると、消え入りそうな声で、

「別に、平気です。謝らなくて大丈夫です」

と言った。

ああ、うん。そう、と言って、椅子に座り直すと、何だか急に、俺は数年ぶりに耳にした故郷の話をしたくなった。

「イトウさん、だっけ？」

シルエットの肩のあたりで、黒髪がゆらっと上下に揺れる。

「イトウさんは大学生？ 進学で上京したの？」

再び、黒髪が上下に揺れる。

「そうか。俺と一緒に。東京は、どこも人が多くて驚かなかった？ 俺、最初の頃は交差点を渡るのに時間かかったよ。タイミングっていうか、うまくつかめなくて。もう慣れたけどね。うん、もう慣れちゃったな。いつの間にか。いつからだろう」

そう言った瞬間、喉の奥がすこし詰まった気がした。それをかき消すようにして、俺は話を続けた。

「あ、もしかしてイトウさんも鯖江高校？ 俺、高校で陸上やってたんだ。駅伝のメンバーで、そこそこ強いチームだったんだけど。まあ、知らないよね。学年も違うし。イトウさんは？ 何か部活やってたの？」

イトウさんは「いえ、特には」と言った。

「そっか。あ、そうそう、『サバエドッグ』って知ってる？」

一度、思いがけずに蓋を開けてしまうと、記憶がどんどん溢れて止まらなくなった。

「高校の近くに『ミート&デリカささき』っていう精肉店があつて、その場で揚げてくれる肉巻きおにぎりなんだけど、たっぷりソースがかかつて、通称『あるくソースカツ丼』！ 部活の帰りに仲間たちとよく寄り道したなあ。監督に見つかつて怒られたけど。でも、試合で勝つとおごってくれて。美味しかったなあ」

椅子に座つたままその場で天を仰ぐと、鼻さきを、あの懐かしい甘辛いソースのおいがふつと走り抜けていく気がした。

あの日から、よく夢を見るようになった。同じ夢だ。

走っている自分の息づかい。沿道からの声援。照りつける日差しと、全身で受ける風。たすきに掛けた手。その直後に聞こえた、アキレス腱の切れるにぶい音。仲間の叫び声。監督の止める腕の力。救急車の音。病室の天井。

退院して歩けるようにはなつたけど、もう、走ることは出来なくなつた。

夢を見るのが怖くなつて、眠れない日が続いて、卒業と同時に黙って鯖江から逃げた。それから、一度も帰っていない。

上京してしばらくすると、夢を見なくなつた。夢自体を見なくなつた。一人

暮らしの部屋で丸まって眠りにつくつと、いつの間にか朝がやってきていて、安心するのと同時に、孤独になった。それでも、鯖江には帰らなかった。

今夜、ひさびさにあの夢を見そうだな、そんな予感がして、俺は椅子から立ち上がった。

「そろそろ戻るよ。ごめん、つまらない話をして。おさき」と、背中にか細い声が届いた。

「え？」

振り向くと、イトウさんが顔を上げてこちらを見ていた。

目が合う。

あれ？ イトウさんは、すっきりとした目元のきれいな子で、どこかで…そう思った時、イトウさんが今度ははっきりとした声で言った。

「私も好きです、サバエドッグ」

ああ、そう。ぼんやりとそんな返事を返そうとした時だった。勢いよくバツクヤードのドアが開いて、俺のひたいに思いきりぶつかった。

その場にうずくまっていると、

「えー、危ないよ、島田さん。そんなとこに立ってたら」と、菊池さんが言った。

そして、

「お客さん。島田さんに」

と続けた。

俺に客？ コブになりそうなのひたいをさすりながら店内に戻ると、あきらかに見覚えのある日焼けした男が、特大ハンバーガーにかぶりついていた。

そして、俺の姿に気付くと、

「おお！ 島田！ 元気かつ！」

と豪快に笑った。

そいつは高校時代の同級生で、駅伝でも同じチームのメンバーだった。

「どうしたんだよ」

驚いてそう聞くと、お前に会いたくて、と、だいぶ気持ちの悪いことを言う。

「まあ、それは半分本当な。お前、全然帰ってこないからさ、鯖江に。みんな会いたがってるんだぜー」

その目は、知っている輝きだった。いつもふざけたことばかり言う奴だったけど、嘘はなかった。

「ああ、半分って？」

照れくさくなって聞くと、

「そうそう。もう半分は母ちゃんの使いっぱしり。妹がさ、上京してここでバイト始めたって聞いて、心配だから一度見に行つてこいって」

「妹？」

「ああ、今日、いる？ あいつ。一緒に働いてるんだろ？ ていうか、あいつ、島田がここでバイトしてるってどこから聞いたらしくて。それでここに決めたんだよ、アルバイトさき。ほら、覚えてない？ 高校の時、いつも俺らの部活の練習見に来てたろう？ おかっぱ頭のちび。お前も何か部活入れて何度も言つたんだけどさ、あいつ結局、毎日陸上部の練習見に来てたよな」

俺は、バッグヤードのほうをちらりと見た。

「もしかして、イトウさんって…伊藤の妹？」

伊藤は「なに言つてんだよ」と、また豪快に笑つた。ハンバーガーをごくご

くとコーラで流しこむ。

「まさか、あいつ、名乗ってないの？」

そう言ったあと、伊藤はにやりとした。前歯がいたずらに光る。

「ああ、そうか。あいつ、まだ続いてんだな。片想い」

「え？」

「島田は、妹の初恋の相手だからなあ」

その時だった。

勢いよくドアの開く音がして、続いてどんどんという地鳴りのような足音が近づいてきた。見ると、耳まで真っ赤に沸騰させたイトウさんが仁王立ちをしていた。

そして、鯖江からはるばるやって来た旧友の島田に向かって、

「お兄ちゃんっ!! やめてよっ!!」

と、きりきり叫んだ。

さっきまで、バックヤードにいた「イトウさん」とはまるで別人のようで、俺はあたまが追いつかなかった。

そして目が合うと、イトウさんは勢いよく両手で顔を覆った。手のすきまから真っ赤な頬が覗いている。

「え、なになに、何ごと?」

菊池さんも、騒ぎに気付いてやって来る。

鯖江からやって来たばかりの伊藤だけが、いつもの調子で、豪快に笑っていた。

「まあまあ、そう怒るな、妹よ。それから、島田よ。きみたちに素晴らしい土産を持って来たんだ。ほらっ」

閉店後、店長の許しを得て、伊藤がハンバーガーショップのテーブルに堂々と広げたのは、大量の「サバエドッグ」だった。

伊藤のどや顔を前に、イトウさんは相変わらず手で顔を覆っていて、すごいタイミングだなと俺は吹き出し、いいにおい! と菊池さんは鼻をひくひくと鳴らしている。

ひさびさに食べたサバエドッグは、すっかり冷えてしまっていたものの、変

わらない美味しさだった。食べながらすこし泣きそうになって、それを誤魔化すために、また食べた。

「島田、お前そんなに腹減ってたのか？」

と、伊藤が本当におかしそうに笑って、その時、なぜか、もうあの夢は見ないだろうと思った。

同じテーブルで、イトウさんもサバエドッグを食べている。顔は、まだほんのりと赤い。

初めてサバエドッグを食べた菊池さんが、

「いいなー、ふるさとって」

と言った。

「私、東京出身だから。羨ましいですよー、こんな美味しいものがあるところに帰る場所があるって」

すると伊藤が、

「今度、おいでよ。鯖江に」

と、菊池さんを誘った。あまりにもさうと自然に誘うから、いつから伊藤

は女子にこんなに慣れたんだと驚いた。

イトウさんもぎよつとしている。

伊藤は、構わず続ける。

「西山公園っていうところで、もうすぐ『つつじ祭り』っていうのをやるんだよ」

「へえ、行ってみたい。つつじってよく知らないけど」

意外に、気が合っているのかもしれない。そう思った。

「そっいえば、お前」

伊藤が、イトウさんのほうを見る。

今日、何度目かのにやり顔をする、

「高校のとき、島田をつつじ祭りに誘う練習してたよな？ 鏡の前で」

がごとんという鈍い音が店内中に響いた。

伊藤が、すねのあたりを押さえてもだえている。

ひさびさに、鯖江に帰ってみようと思った。つつじ祭りの頃に。

「あ、まだおった」

玄関ドアを開けた途端、足元に仲良く並んだ2足の靴に気付いた葉月は、そのまま家に入ることなく静かにドアを閉めた。

さっきまで乗っていた自転車で近くのコンビニまで行こうと思ったが、暗いなかカバンを漁って小さい鍵を見つけるのは面倒くさい。

コンビニまでは車でも五分程度なので、思い切って歩いて向かうことにした。

葉月が生まれ育った家の周りは、街灯がほとんどない。

除雪機で路肩に寄せられた雪の塊が、いまは雪明りとなって足元を照らしてくれている。

自分がつけた自転車のタイヤ跡を踏みつけるようにして、黙々と歩を進める頭の中で、いま自分の家に取り込んでいる客人について考えを巡らせている

と、ポケットの中のスマホが振動を伝えてきた。

「はあちゃん、今どこにおる？さっき玄関が開いた気がしたんやけど」

葉月がいったん家に帰ってきたことを耳ざとく察知した母が、いつもより少し丸い声で居場所を探ってきた。

「いったん帰ったんやけどー、甘いもん食べたくなって今コンビニに向かいよるところ」

と返すと

「甘いもんなら時田くんが今日お菓子の詰め合わせ持ってきてくれたで、家にいっぱいあるわ」

と、暗に「即帰宅せよ」と匂わせてくる。

「お姉ちゃんと時田くん、まだおるん？」

もうほとんど梱包終わらせたって言っとらんかった？」

葉月はいったん母親の意向に気付かないふりをして状況を確認する。

「桃子が今頃になって、家に置きっぱなしやった服と化粧品類も持っていくつて言い始めたんよ。」

なんか似たような色のマニキュアがいっぱいあるで、はあちゃんに譲る分も仕分けするって言うて、時田くんと一緒に作業しとるわ。

まだ1時間くらいはかかりそうやけど、2人ともはあちゃんの顔見たがっとなるよ」

母からの圧が強まったのを感じつつ、

「んー、もうコンビニ着くところやから、ちょっとだけ立ち読みしてから帰る」

と葉月は半ば強引に会話を打ち切り、終話ボタンを押してスマホをポケットに突っ込んだ。

買い物を終えてコンビニから出ると、ちょうど母の軽自動車が駐車場に入ってきてくるところだった。

パッシングをしながら出入口に寄せてきたので、無条件に助手席に乗り込む。「迎えに来んでもよかったのに」

と言いながら右側に目線をやると、運転席に乗っていたのは母ではなく、い

ま葉月が最も顔を合わせたくない時田くんだった。

自分の顔を見つめたまま次の言葉を出せずにいる葉月に対して、時田くんはにやつと笑って

「ひさしぶり。まだ道に雪残つとるし夜道は危ないで、迎えに来た」
と言いながらハンドルを回す。

駐車場から出る際、家とは逆方向にウインカーを出していることに気付いた葉月が

「時田くん、逆、逆」
と言つと、

「迎えに行くついでに、榎清水に水汲みに行こつさ。
お義父さんとお義母さんに頼まれたんやつて」

と返してきた。

後部座席を振り返ると、なるほどすっかりポリタンクがやつ積んである。

「もー、入籍したてのお婿さんに遠慮なく用事頼んで……」
と独り言をこぼすと

「なんもなんも。」

あそこ段差があつて湧出口も低いで、腰痛めとるお父さんにはきついって。

頼ってもらえるの嬉しいし、ポイント稼ぎや」

と時田くんは明るく返してきた。

ああ、こういうなんにでも前向きに明るく答えてくれる時田くんが、やっぱり好きだなあと葉月は思う。

時田くんは、葉月の中学の頃の家教師だ。

週に3回、3教科をみっちり教えてくれたおかげで、葉月は無事に第一志望の高校に合格した。

当時大学生だった時田くんは地元の銀行に就職し、地頭の良さと人柄も相まって周囲からの信頼も厚いらしい。

そして明日、転勤に伴って葉月の姉の桃子と共に名古屋に引っ越してゆく。

「葉月ちゃんももう来月から社会人やなあ。早いなー」

コンビニから車で5分のところにある榎清水にはあつという間に到着し、暗

がりのなか器用に車を停めながら時田くんが言う。

家族や友達がそろって自分のことを「はあちゃん」と呼ぶのに、時田くんだけは「葉月ちゃん」と呼んでくれる。

「ほんまに早い。もう中学の時の記憶とかないもん」

と言いながら、葉月は慣れた手つきで後部座席からポリタンクをおろしていく。「いやいや、それは早いって。頼むからあの猛勉強の日々だけは忘れんとってや」

と時田くんが笑いながら声を張り上げる。

忘れんよ。

葉月は顔に笑みを貼り付けたまま心の中で返事をする。

8畳の部屋。

ストーブの上のやかんの湯気。

消しゴムのかすだらけの机。

窓の結露1粒1粒に映った、時田くんと私。

添削するときの真剣な表情の時田くんの横顔。

長いまつ毛。

集中しているときの癖で、すぼめられる唇…。

「そういえば、女の子に言うことやないけど、肌の調子ようになったんやない？
このお清水のおかげ？」

と、湧出口が低い^{ため}。ポリタンク^の角度調整に苦戦しながら時田くんが話しかけてくる。

「えー、このお清水にそんな効能あるって聞いたことないし、どうなんやろ？
単に受験勉強の寝不足が原因やった気もする。

ていうか私、お母さんがこの水を何に使っとるんか、実は知らんのやってね」

「そうなんー!? さっきお義母さんこれでコーヒー淹れてくれたで。美味しかった。

昔から米炊くときにも使っとるって言うってたから、少なからず効果はあったんやって」

と大声で笑いながら時田くんが返事をしてくる。

私、顔のニキビが落ち着いたら時田くんに告白する気でおったんよ。

今、この言葉を伝えたら時田くんはどんな反応をするだろうか。

高校に入学してから、友達以上の関係になりそうな異性は何人かいたが、いつも頭の隅に時田くんのがよぎって二の足を踏んでしまった。

ねえ時田くん。

私はこれからもずっと男の人と関わるたびに、時田くんと比べてしまうのかな。

お姉ちゃんが時田くんと同じ大学のサークルに入らんかったら、私にもチャンスはあったのかな。

3月といえど、まだ夜は冷え込みが厳しい。

残酷なほど星がきれいな空を見上げながら、葉月は涙が出そうになるのを必死

にこらえていた。

時田くんは3つ目のポリタンクでようやくコツをつかんだのか、楽そうな姿勢になって葉月と同じように夜空に目線をやった。

「はー、ここは星がきれいやなあ」

と時田くんが感嘆の声を上げる。

その大きな声につられて時田くんの横顔を見た葉月は、はっと小さく息を呑んだ。

時田くんの瞳は星空を映しとるけど、頭の中では違うもんを見とる。

時田くんは、このきれいな星空をお姉ちゃんと一緒に見たいと思うとる。

わざわざ確認せんでも分かる。

だって私もこの5年間、何回も今の時田くんと同じ表情になったことがある。

美味しいものを食べたとき。

おもしろい動画を見つけたとき。

美容室でキレイにセットしてもらったとき。

新しい洋服に袖を通したとき。

化粧がうまくいったとき。

いつでも最初に思い浮かんだのは、いつも時田くんの顔やったよ。

不思議なことに、時田くんの心の中に自分がいないことを思い知らされたこの瞬間、葉月の心は一気に軽くなった。

時田くんが最後の1つのポリタンクにお清水を溜め始めたとき、

「明日の今頃は名古屋や。」

葉月ちゃん、名古屋に遊びに来てな」

と話しかけてきた。

「遊びに行くって言うても、ゴールデンウィークには結婚式でまたこっち戻ってくるやん」

と葉月が笑うと

「そやな。つつじまつりは人がすごいで、まつりのあとに3人で西山公園に行

こつさ」

と時田くんが言う。

葉月は笑顔でうなずきながら、榎清水に来る途中に目に入った近松門左衛門像を思い出す。

私の恋は、300年後も歌舞伎や浄瑠璃の演目になるような大それた恋じゃない。

どこにでもありふれた、ありきたりの恋。

だけど私にとっては、一生に一度の、私だけの恋だった。

この恋の痛みを、しっかりと覚えておこう。

この恋の悲しみや苦しみを噛みしめて、咀嚼して、吸収して消化して、次の恋の栄養にしよう。

水を溜め終わった時田くんが、お清水に置いてあったひしゃくで水を掬って「寒いけど、どう、汲みたて1杯？」

と差し出してくる。

笑いながら受け取って飲み始めた葉月は、ぽっかり穴があいた胸の中に、悲しみと幸福が一筋垂れてゆくのを感じるのだった。

見聞録

近松の里

たちまち

※近松の里づくり事業推進会議で作成した冊子を掲載しています。

近松門左衛門が生まれ育ったまち「さばえ」



江戸時代を代表する文豪

近松門左衛門

ちかまつ もんざえもん



近松門左衛門肖像之像
(財) 林文庫蔵

近松はやはり鯖江で生まれていた!?
「近松鯖江誕生説」とは

大阪市立大学の森修先生が、杉森本家の系譜・親書と福井藩の歴史書の記述を検討して、近松門左衛門は福井で生まれ、殿さまの松平昌親が福井から吉江にやって来た後に吉江に移ってきたと発表してから60年、その説が定説とされてきました。

でも、正保2年(1645)に父忠昌が死去し、同年、寡母は2人の側室腹の男子(昌親・昌親)に松岡・吉江への分家を認めました。そして、その翌年、昌親は母・妹とともに江戸に赴き、吉江に入るまで江戸暮らしでした。その間、その家来たちが、殿さまの留守を預かって、吉江の地で藩政をとり仕切っていたのです。

平成30年(2018)三好修一郎福井大学名誉教授が、歌舞伎学会の雑誌において、その事実を明らかにしました。

ところで、昌親の叔母が嫁いだ西光寺には、昌親からの手紙が数多く残されています。昌親が「従五位兵部大輔」の位階を授かった時、西光寺から家老の高屋善右衛門宅にお祝いに届けつけました。昌親からの御札の手紙の中に、その名前があります。それは、**近松が生まれる1年前です**。その頃には、家臣たち(と、その家臣)は、吉江にいたという何よりの証拠です。つまり、近松は、吉江で生まれたと考える方が理にかなっているということです。



三好修一郎
福井大学名誉教授



昌親からの御札の手紙(高屋善右衛門の名前があります)



近松門左衛門が生まれ 多感な幼少期を過ごした近松の里 近松作品の原点になったまち



吉江藩主：松平昌親
瑞源寺蔵

近松の父は吉江藩士

立待地区は、江戸時代、吉江藩の城下町でした。吉江藩は、1645年に福井藩第3代藩主・松平忠昌の逝去後、3男昌親が2万5千石を分知され、立藩しました。この時に、近松の父は昌親公の家臣として福井藩から吉江藩に移りました。しかし、1674年に福井藩第5代藩主、松平光通が逝去すると、嗣子がいなかったため、昌親が本藩である福井藩を継ぎました。そのため、吉江藩は三十年足らずで廃藩となりました。

たちまち（立待）の名称の由来

泰澄大師のその母「伊野姫」が祭神と伝えられている立待小学校の前の小さな社「経智神社（きんちじんじゃ）」「泰澄大師が越知山に修行に行っていた母を母親が立って待っていたという伝説から「立待」の名称が生まれたとされています。



人形浄瑠璃や歌舞伎のすぐれた作品を数多く残した近松門左衛門（1653-1724）。義理人情に傾む日本人らしい姿を描き出す近松文学の土壌は、越江の豊かな自然と人情、風情に育まれたと言えるでしょう。「東洋のシェイクスピア」と呼ばれるほどに、人間の悲しさや愚かさ、やさしさを描いたその作品は370年を経た現在も愛され続けています。









近松の里 たちまち 見聞録

Tachimachi

立待をまわって 歴史を学ぼう!



立待公民館前にある近松門左衛門記念碑庭園のサツキは、浄瑠璃に欠くことのできない三味線の形をし、初夏には美しく彩られます。奥に近松の御世文を記した碑があり、父の吉江藩士杉森信義と近松が鯖江を離れるまでの解説が記されています。手前には、福井県出身の作家・水上勉氏揮毫による「近松門左衛門先生由縁之地」と記された石碑も建てられています。

近松門左衛門 記念碑庭園

ちかまつのもんざゑもんをわいていん



立待公民館内にあります。徳川家康公のひ孫にあたる吉江藩主・松平昌親公や近松と鯖江の関わりについて紹介しています。文楽関係の展示をはじめ、鯖江市在住の創作紙粘土人形作家がとうかずお氏によるジョウマ風人形の展示もあり、子どもから大人までが楽しみながら、近松の幼少時代を振り返ることが出来ます。

近松の里めぐり 情報館

ちかまつのもんめぐりじょうほうかん



立待の指定文化財をめぐる



③ 春慶寺の大杉

●所在地 米田町

春慶寺本堂左脇に位置する2本の杉のうち南側の目通り400cmを超える大木。真っ直ぐに伸び枝張りも大きく、今なお樹勢は盛んである。樹齢から推定すると、近松もこの大杉を見ていたのかも?



徳元図

如祐は本願寺7世存如の長女で、蓮如の妹。西光寺は宝徳3年(1451)、存如が丹生郡石田村に建立した一字に始まり、如祐に荒川興行寺の永存を迎えて初代とした。晩年を橋川(旧朝日町)で過ごしたことから橋川尼公とも呼ばれる。



① 絹本着色如祐尼像

●所在地 杉本町 西光寺 ●時代 16世紀

《福井県指定文化財》

立待地区には、貴重な多くの文化財があり、いつでも直ぐに見ることのできるものもあります。一度訪ねてみませんか。

map
number
2
吉光寺表門

西光寺表門

全国でも珍しく殿号で呼ばれる西光寺は、本願寺7世・存如が旧石田村に開いた道場を起源とし文禄4年（1595）、現在地に再建されました。表門は、吉江藩主だった松平昌親公が福井藩主を継ぐことになったことで、廃藩となった吉江藩館の表門が西光寺に移築されたと伝えられています。当時の吉江藩の面影を残す希少なものと云えるでしょう。国の有形登録文化財に登録されています。



map
number
3
石田の渡し場跡

石田の渡し場跡

江戸時代から明治頃まで、河野川では、舟を利用した「河川交通」が盛んで、米やさまざまな物産が三国湊まで運ばれました。古い文獻によると、この石田にも舟運し場があったことが記されています。近松作品に影響を与えたと云われている「幸若舞」は、日野川の向こう越前町朝日地区が発祥の地です。近松は、「幸若舞」を見るために石田の渡しを利用したのだと云う。



map
number
4
吉江七曲り通り

吉江七曲り通り

七曲り通りは、吉江藩の城下町の名残りで、町人町の一つ新町から藩主の住む陣屋までの道のりを、何度も屈曲させて大回りさせるという城下町特有の道路構造をしています。変わらない地割りや道路幅から吉江藩当時の様子を伺い知ることができます。一年を通して趣きがありますが、春には桜の花で彩られ、美しい風景を醸し出します。



③ 春慶寺の石造物
しゅんけいじのせきぶつ
●所在地 米田町 ●時代 室町時代・近代



室町時代から近代にかけて建立された墓石群である。いずれも惣谷石製で、一石五輪塔7基・板碑2基・石仏65基・墓石41基・無縁塔1基・塚塔1基におよぶ。石造物がこれほど多く遺存しているのは、市内でも稀である。

④ 西番の名石
にしはのなまこくせき
●所在地 三馬野出町 ●時代 天保15年（1844）



自然露出の凝灰岩に彫刻されている。道路に面した崖面直中央に舟形光背を彫り込み、中軸線下方に「南无阿彌陀仏」の六字名号を彫刻する。光背の右側面には目的・作成年・願主が刻まれる。良好な保存状態を保っている。

⑤ 西番の磨崖仏1・2号
にしはのまいぶつ
●所在地 三馬野出町 ●時代 1号 天文15年（1546） 2号 江戸時代前期



市内で確認されている唯一の磨崖仏である。1号は阿弥陀三尊像が彫刻されているが、現在は、顔や顔が不鮮明である。2号も元来は阿弥陀三尊像であったが、両脇侍が欠落している。また、中尊左側にも阿弥陀如来像が彫られている。



福正寺

ふしじょう

map
Number 5

創建は文治2年(1186)。元は天台宗の寺院でしたが、長享2年(1488)に浄土真宗に改宗。戦国時代の戦火を被りながらも寺坊が守られ、松平昌親公が吉江藩邸を建築する際、土地を交換し現在地に寺域を定めまし。この時昌親公より多くの材木を寄進されています。本堂正面軒下には、悪夢を食べてくれるといわれている雲母(雲母)が彫刻されています。



西番天満神社

にしばんてんまん

map
Number 6

「祭神は、「学問の神様」として知られる菅原道真公。公の第3子である乙千代丸がこの地に住み、公の像を彫ったとされています。その後落雷により、御神像は焼失し、作り直されました。西番天満神社は、近松の父が住みえた吉江藩主・松平昌親公の祈願所でもあります。立待の里の総鎮守の社でもありました。天満宮の横に寄り添うように乙千代丸を祀る神社が建てられています。



吉江藩館跡

よしえはんかんと

map
Number 7

吉江藩が成立した正保2年(1645)以降、藩主松平昌親公は、陣屋や町並みの整備に着手。従来の町に新しく整備した町を合わせて「十一口」「これを縦に並べて「吉江」とされ、立待郷吉江町が生まれました。昌親公は入幕後、政治家としての手腕をふるい、新しい農地を開拓したり、商工業に力を注ぎます。吉江は丹生郡の政治経済の中心地として隆盛を極めました。

立待の指定文化財をめぐる



木造阿弥陀如来立像

●所在地 本町 西光寺 ●時代 平安時代後期

穏やかな表情の丸顔・薄い体奥・平板な肉付け・浅い衣文線などの特徴から、12世紀前半頃に当地で制作されたと推定される。平安時代後期の典型的な来迎印阿弥陀如来像として貴重である。



縦89.5cm、横133.6cm

近松門左衛門作の「国性路合戦」で、和藤内が千里ヶ竹で虎を追治する場面を描いている。和藤内とは、和(日本)でも藤(唐・中国)でも内(ない)という洒落で、奉納者は現在の吉江町一帯の4名である。

和藤内図絵馬

●所在地 三河町 立待郷西番天満神社 ●時代 天保14年(1843)



縦62.4cm、横75.8cm

黒駒のたくましい体つきが特徴的な絵馬。髻がれた縄を切らんばかりの黒駒の前脚付近の盛り上がった筋肉と、柔らかに結わえあげられた鬣が対照的で、神馬の威厳を十分に醸している。

繫馬図絵馬

●所在地 三河町 立待郷西番天満神社 ●時代 貞享元年(1684)



おまつもももんろう
近松門左衛門坐像
承応2年(1653)、結江で生まれ、多感な幼少時代を過ごした近松。近松作品の原点になったまち「結江」。その土壌は、結江の豊かな自然と人情、風情に育まれたと言えるでしょう。浅水川沿いの通りに面した見晴らしのよい場所に、作品を執筆しているかの如く筆を走らせる近松の坐像がどしりと鎮座しています。近松会館の敷地内にあります。



おまつ公園
大谷公園(まの公園)
グミ、栗、イチジク等、実のなる樹木を植樹して、四季を通つて青で、収穫し、食することによって体験学習型公園を目指しています。樹木の中には、観音聖人の「三度栗縁起」という伝説に由来する「本の葉の木」もあります。自然に囲まれていて、高台にあるため見晴らしもよく、特に夕日の眺めは美しいです。遊具や駐車場も整備されています。



おまついし
春慶寺
寺伝によると、春慶寺の前身は泰澄大師が白山修行に立つ際、立待にあつた草庵に名付けた心敬寺にあるとされます。戦国時代には、心敬寺を中心に「千坊がひしめていました」が、織田信長の越前侵攻の機を討ちに遭い、現在の寺院だけが残りしました。吉江藩主松平島親公の篤い信仰のもと、寺号を「春日山春慶寺」と改め、同藩の祈願所に定められました。



と 糺野お清水

●所在地: 糺野町 ●時代: 近世以前

京都の北野天満宮北側の「糺の森」とこの地の地勢が似ていることからこの地を「糺」と呼ぶようになった。ここに祀られているのは、右手に剣、左手に鏡を持つ箭谷石製の白不動明王である。

馬場家文書

●所在地: 杉本町

北町堀内山島繁樹行状 延仁元年(1647)

島住家御書状 寛文元年(1661)

島住家御書状 天明3年(1813)

島住家御書状 享和2年

画像希望 4点

戦国時代の百姓と大名朝倉氏の重臣島住氏との関係が物語り、本市の北部に位置する立町郷の開発や耕地の状況をうかがう貴重な資料である。朝倉氏の発給文書の中で、具体的に百姓の様子知られるものは珍しい。



帯のお清水
 ここは、千古の昔より湧き出
 ており、健康長寿の水として
 親しまれ、村人や旅人はお不
 動様に手を合わせ、お清水で
 喉を潤したといわれています。
 吉江藩主・松平昌親公は、
 笏谷石で、水飲み場と洗濯場
 に分けて整備し、城下町に水
 を引き入れるために木樋を敷
 設して上水道を整備しまし
 た。池の中心は三味線のパチ
 の形をしています。ふくいの
 おいしい水に認定されている
 とともに、市の文化財にも指
 定されています。



存如上人御廟所
 西光寺を創建された存如上
 人の御廟所は、俗に「お塚所」
 と呼ばれています。存如上人
 は、真宗中興の祖と言われる
 蓮如上人の父君です。上人の
 御廟所は西光寺の南東一キロ
 メートル先の札地区にあり、
 西光寺飛地境内地として当
 時の面影を残し、お同行の尊
 厳を表しています。昭和24年、
 存如上人五百回忌忌法要の
 際には、本山より光明親下の
 ご親拝をいただきました。



諏訪神社
 祭神は諏訪大明神、建部名方
 富命・入坂富命。明治14年
 1月1日、信濃国・長野県諏
 訪大社、下社より御分霊を
 勧請して祀り、更に大物主之
 神を合祀しました。境内にあ
 る末社稲荷社には、保食神を
 祀っています。神社境内の総
 面積は711坪です。春祭
 り、夏祭り、秋祭りの祭日を
 27日に定めているのは、諏訪
 大社、下社の御祭礼に合わ
 せて行っているからです。



立待の指定文化財をめぐる

画像希望2点



●所在地：立待地区 ●時代：江戸時代後期・建部
 ●石田絹（無形文化財）

木綿の織物で、その起源は、文政
 年間(1818~1829)、丹生郡立待
 村下石田の高島善左衛門が自ら
 工場を建設し、美濃から職工を招
 いて製織したのが始まりとされ
 ている。女学校や小学校の制服として
 採用され「学校絹」と呼ばれた。



浄土真宗本願寺7世存如が、門
 徒に下げ渡したものである。こ
 のような尊像は蓮如期以降に急
 増するが、存如が下付したものは
 全国的にも少なく、越前に伝
 わる遺品としては最古のもの
 である。



●所在地：石田町 善光寺 ●時代：室町時代
 ●絹本着色方便法身尊形像



浄土真宗に通有の来迎印阿彌陀如
 来立像であり、鎌倉も鎌倉時代以来
 の善せ方を臨観している。本像の白
 座は、江戸時代に後補されたと考え
 られるが、真宗系仏像のものと比べて
 非常に段数が多く、本寺の寺格の高
 さを如実に示す例として貴重である。

●所在地：石田町 西蓮寺 ●時代：室町時代
 ●木造阿彌陀如来立像

石田神社

祭神大日靈貴神は、天照大神と同神です。神武天皇の頃、ここに石田彦という豪族がいました。神武天皇御東征の時、この地の悪者どもを平らげて、天皇に忠誠を尽くしましたので、その功績を褒められ玉串を授け、石田郷を賜りました。石田彦は拝殿を築き、神武天皇を神としてあがめ奉りました。これが石田神社の起こりです。



岡井慎吾石碑

小学校の教員から博士になつた教育者で、「三編の研究」で、大きな功績を残した日本人を代表する漢学者です。最初は福井県小学校の先生であつたこともあり、母校でもある立待小学校の校歌や勤務した朝日小学校等の校歌を作詞しています。立待小学校の校歌には「学びを大切に」し、山に登るようになつて欲しいという願いが込められています。



石田織元祖 高島善左衛門翁碑

江戸時代の日野川は大雨が降ると暴れ川になり、洪水になるたびに川筋が変わりました。石田という地名は、日野川が氾濫するたびに田畑が石の野原になることからついたといわれています。善左衛門は、農業以外にお金を得ることができないだろうと考え、石田で始めた織物が石田織です。石田織は「学校織」ともよばれ、県内の小学校や女子学校の制服として使用されました。



「くつはきの阿弥陀如来」様に
つないでいただいた大切な「緑」
―歌舞伎俳優 中村徳太郎さん 近松山形市出身―



写真上：近松山形市出身の歌舞伎俳優中村徳太郎さん（近松山形市出身）
写真下：くつはきの阿弥陀如来（歌舞伎俳優中村徳太郎さん）
写真下：くつはきの阿弥陀如来（歌舞伎俳優中村徳太郎さん）

近松山形市が、上方歌舞伎創設者の一人初代・阿弥陀如来の
ために書いた歌舞伎作「くつはきの阿弥陀如来」の作品
は、三國福井県市町の道徳が主舞臺で、現存する月
堂寺歌舞伎町のくつはきの阿弥陀如来が主舞臺です。
「くつはきの阿弥陀如来」は、元禄時代、京都での出陣
から行方不明になっていました。三好修一郎福井大学
名誉教授による「近松くわ」講座が月堂寺で開催され
た際に、「くつはきの阿弥陀如来」が300年
の時を経て見つかった経緯をお聞きし、所有する金龍院
を訪ねたことが、中村徳太郎さんをお迎えしてのくつ
はきの阿弥陀如来（近松くわの阿弥陀如来）が近松
山形市で300年記念「近松の里」のお祭り開催につなが
りました。
「近松の里」は、これからもこのくつはきを大切に
近松のまちづくりを進めていきます。

近松門左衛門が生まれ育ったまち「さばえ」って どこにあるの？

福井県のほぼ中央に、人口約7万人のまち鯖江市があります。
眼鏡フレームの国内生産シェア9割以上を誇る眼鏡産地の中心地であり、
そのほか繊維王国福井の中核を担ってきた繊維産業、
1,500年余りの歴史を有し国内の業務用漆器の8割を占める漆器産業、
そしてIT産業などが集積した「ものづくりのまち」です。



近松情報インフォメーション

鯖江市まなべの館 2F 「近松の部屋」

〒916-0024 福井県鯖江市長泉寺町1-9-20
☎0778-53-2257

立待公民館 「近松の里めぐり情報館」

〒916-0005 福井県鯖江市杉本町702-2
☎0778-51-3376

<https://www.city.sabae.fukui.jp> (鯖江市ホームページ)



お問い合わせ

立待公民館

〒916-0005 福井県鯖江市杉本町702-2
☎0778-51-3376



製作:立待地区区長会 令和4年12月

■さばえ近松文学賞 ～恋話 (KOIBANA) 2025～ ■主催者

令和8年10月9日 発行

近松の里づくり事業推進会議

〒916-0005

福井県鯖江市杉本町702-2 (立待公民館内)

TEL 0778-51-3376

【電子書籍版編集】

発行社 [DoCompany出版 \(ボボブックス\) BoboBooks](#)

東京都港区南青山2-2-15 ウィン青山14階

TEL 050-3692-4434

福井県福井市灯明寺1丁目1301

TEL 0776-28-5233

<https://bobobooks.com>